東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

中学校家庭科で道徳的価値「ジェンダー平等」をはぐくむ視聴覚教材の開発

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大竹,美登利, 池尻,加奈子, 小野,恭子, 佐藤,麻子, 石津,みどり メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/132639

東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ　**64**: 193－202，2013.

中学校家庭科で道徳的価値「ジェンダー平等」をはぐくむ視聴覚教材の開発

大竹　美登利*・池尻　加奈子**・小野　恭子***
佐藤　麻子****・石津　みどり*****

家庭科教育学分野

（2012年9月13日受理）

1．はじめに

新しい学習指導要領が全面実施されたが，そこで道徳的内容をすべての教科の中で教えることが推進された。その内容項目の中に，「２．主として他の人とのかかわりに関すること（4）男女は，互いに異性についての正しい理解を深め，相手の人格を尊重する」があり，学習指導要領解説の中でも「男女が，社会の対等な構成員として，自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され，もって男女が平等に政治的，経済的，社会的及び文化的利益を享受することができ，かつ，共に責任を担うべき社会の実現が求められている」とある。

これまで，日本社会における道徳的価値観は，「男性は，仕事，女性は，家庭」と性別役割分業を強く意識されていた。1979年，女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約が国連で採択されたことより，男女が互いに人権を尊重しつつ，能力を十分に発揮できる男女共同参画社会の実現にむけて，1999年に男女共同参画社会基本法が施行された。現代は，「ワーク・ライフ・バランス」という言葉が浸透し，男女共同参画に対する意識が高まりつつある。このように，性差で区別されることなく，社会を構成していくことが望まれ，多様な価値観をはぐくむことが求められている。しかし，世代によっては，過去の家長制度や地域ごとの習慣などが残っていて，無意識のうちに男女を区別して考えてしまうことがあった。その意識が顕著で，個人の希望や個性を無視した生き方を強いられることさえあった。若い世代でも男女を区別していることを意識せず，ジェンダーバイアス的な考えで行動していることがある。そこで，家庭科という教科の中で道徳的価値「ジェンダー平等」に関する授業を検討することにした。

家庭科とジェンダーに関しては，堀内[1)]が述べているように，家庭科教育の歴史においてジェンダーの課題があった。家庭科における総合的学習のテーマとして，ジェンダーを取り上げることに価値があり，ジェンダー平等というテーマを家庭科教育が担っていく必要性があると述べているように，家庭科という教科の特性が生かされると考える。

さて，1993年に中学校技術・家庭科が，1994年には高等学校家庭科の男女共修が実施されてからは，家庭科の学習では男女共同参画という視点から授業を見直し，ジェンダーバイアスについて考える授業実践が数多く行われている。例えば，吉岡ら[2)]の報告にもあるように，中学校の家庭科においては幼児理解を行うために，幼稚園や保育園に行き幼児と触れ合う活動を取り入れている学校もある。また河村ら[3)]は保育領域において学習者が女子に限定されていた時期は，母性が強調されていたとし，男女共修になってから，学習者自身の成長と重ね合わせて学習する実践を行っている。

＊　東京学芸大学生活科学講座
＊＊　東京学芸大学附属特別支援学校
＊＊＊　北海道教育大学釧路校
＊＊＊＊　東京学芸大学附属小金井中学校
＊＊＊＊＊　東京学芸大学附属国際中等学校

しかし，保育の学習において学習内容の中心は幼児の成長や発達を理解することであり，家庭科の学習内容の一つであるジェンダーと保育を意識させる実践は少ない。

そこで，「家族・保育内容」の中でジェンダー平等の視点を取り入れた授業実践を行うために新たな教材を開発することとした。本研究では，授業実践で活用することで教材の有効性について検討することにした。

２．目的

生徒がジェンダー意識に気づき，男女を取り巻く問題について考察できる教材・授業の開発を本研究の目的とした。

そこで，始めに，視聴覚教材の開発を行うこととした。妊娠から出産までの胎児の映像及び家族の会話，乳児とのくらしを中心とした視聴覚教材を作成した。

次に，作成した視聴覚教材の有効性を検討するために，中学校家庭科「家族・保育内容」の授業実践を行うこととした。視聴覚教材を活用した授業場面での生徒の気づきや学びを分析し，めあてにそった教材であったかどうか検討し，教材の有効性を明らかにした。

３．方法

３．１．視聴覚教材の開発

小中高の家庭科の指導内容にあわせて，子どもの誕生から子どもの成長と両親の保育への関わりに関する教材を作成した。

ある30代の夫婦を事例に，新しい家族を迎え，新しい生活を始めるにあたり，どのような気持ちでいるのか，また出産，育児を通して，生活や家族関係はどのように変化するのか，主に男女の性差に対する考え方，性別による役割などについて追跡した。夫婦自身やその家族が撮影した動画や写真を編集し，視聴覚教材を作成した。

開発した視聴覚教材は，教材①「出産前の会話を中心とした教材」，教材②「あっくんのお誕生」，教材③「あっくんの成長」，教材④「一歳時，家族インタビュー」の４種類である。道徳的価値「ジェンダー平等」を感じられるような工夫として，父親の育児参加の様子を取り入ることにした。教材は１本あたり，10分程度に編集し，編集には，Macの動画編集ソフトiMovieを用いた。いずれのDVDもチャプターでシーンごとに区切るようにし，授業展開に合わせて必要な場面を選択し，放映できるようにした。それぞれの教材の内容について以下に解説する。

教材①「出産前の会話を中心とした教材」

ジェンダーを意識するための要素として，90代の曽祖母，60代の祖父母，30代の夫婦３世代それぞれの，妊娠４カ月時における性別判明時のやりとりを収録した。その内容について，表１に示す。

教材②「あっくんのお誕生」

出産前後の様子と夫婦の会話をまとめた。出産前の夫婦の会話では苦しい，大変，不安といったようなネガティブな感情と，出産後の夫婦の会話ではうれしい，感動といったポジティブな感情を取り入れ，出産前後での気持ちの変化が伝わるような編集を行った。その内容については，表２に示す。

表２　教材②「あっくんのお誕生」

父親は出産に立ち会った。 誕生したばかりの赤ちゃんを囲んだ夫婦の最初の会話の様子。 赤ちゃんは，元気に泣いている。 母親は，興奮した様子で，出産の大変さを語り，一緒にがんばった我が子を褒める。 父親は，赤ちゃんが無事生まれたことを喜ぶ。

表１　教材①「出産前の会話を中心とした教材」

【妊娠４ヶ月】	夫婦で胎児動画を見ながら，性別がどちらか予想をしている会話の様子。 また，胎児の指が5本ある，心臓が動いていることがわかり，安心している会話とその様子。
【妊娠５ヶ月】	胎児の性別が男児だとわかり，父親は一緒に水泳を，母親は料理をできる子になってほしいと期待を話している。母親は，胎動を感じるようになり，生まれてくる子どもを実感。
【出産１か月前】	妊婦生活を振り返り，曽祖母が男児を授かったことに対し，「よくやった」とコメントしたことや，祖父母が喜んでいた様子について語る。

教材③「あっくんの成長」

赤ちゃんを迎えた夫婦の新たな生活の様子を生後３ヶ月までまとめた。父親がおむつ替えや沐浴をしたり，抱っこひもをつけて，散歩をしたりする様子を通して，父親の育児参加も映像の中に取り入れまとめた。また，祖母やいとことの関りの様子を取り入れ，育児がさまざまな人によって支えられている様子が伝わるようにした。内容について表３に示す。

教材④「１歳時　家族インタビュー」

家族インタビューと題して，１歳の誕生日を迎え，これまでの育児や生活について語り，自宅で，１歳児と関わる家族の自然な様子を記録した。内容を表４に示す。

この質問内容については，附属中学校において行った実践で明らかとなった親子ゲストへの質問内容の傾向をふまえて，妊娠中，育児について，子どもについて，親自身の生活について等を取り入れた。

この教材④は授業展開において親子ゲストを呼ばずに，授業を展開する際に用いることを念頭において作成した。

３．２．授業実践

附属中学校I校・K校・T校，３校において生徒の実態に合わせ，指導計画を立て，授業実践を行った。対象生徒は中学３年生である。また，教材の有効性を比較検証するため，授業の構成は，２つのパターンとした。

授業パターンAは第１次に，開発したDVD（教材①，教材②，教材③）を用いた授業を行い，第２次に，DVDに登場した夫婦と赤ちゃんの親子ゲストを教室に迎え質疑応答を行う構成にした。

授業パターンBは第１次に，開発したDVD（教材①，教材②，教材③）を用いた授業を行い，第２次に教材④「１歳時　家族インタビュー」を使い，親子ゲストを迎えない構成にした。表５に授業展開と使用教材について示す。

パターンAの授業はI校とT校で行い，パターンBの授業はK校で行った。各校の実践時期，時数については表６に示す。表７には，第１次の授業における各校の発問内容を示した。生徒の実態や前後の単元の授業内容，他教科との関連に応じて，構成を変えて授業を行った。

表３　教材③「あっくんの成長」

【おむつ替え】	生後２日，初めてお父さんがおむつ替えをする様子
【授乳】	入院中の助産師との会話
【沐浴】	夫婦で協力して沐浴をさせる様子。
【寝かしつけ】	寝た子を母親がそっとソファーに寝かせる場面。
【祖母とのかかわり】	孫の誕生を喜び，あやす様子
【うつぶせ】	生後３ヶ月，うつぶせにして顔をあげられるようになった我が子の成長を両親ともに喜ぶ場面。

表４　教材④「１歳時　家族インタビュー」

対象	カテゴリー	質問内容（質問文言）
母	妊娠中	子どもを授かったときの気持ちや妊娠中のことをお母さんに伺います。生まれる前に大変だったことや，子どものために気をつけたことはありましたか？
父	出産	お父さんは，出産に立ち会われましたが、どんなことを感じましたか？
母	出産	出産とは，どんなものでしたか？
父	子	名前の由来や込める気持ちを教えてください。
父母	自身	家族が増えて，これまでと生活が変わったと思いますが，どうですか？
父母	育児	今までの育児を振り返って，大変だったことや，これはうれしかったというようなエピソードを聞かせてください。
父母	子	これから、どのように育っていってほしいと願っていますか？

表５　授業展開と使用教材

授業展開	使用教材
（第１次） 「誕生前からはじまる家族との関わり　～家族の気持ちを考える～」	視聴覚教材①
「子どもの誕生と家族のくらし ～父親・母親への質問を考える～」	視聴覚教材②，③
（第２次） 「子どもの成長と家族の関わり　～父親・母親からの回答を知る～」	授業パターンA 視聴覚教材の親子のゲスト
	授業パターンB，視聴覚教材④

表６　各校の実践時期，時数

	I校	T校	K校
実施時期	・2月	・7月	・5月
授業時数	・全３時間	・全1.5時間 （１次を0.5時間）	・全３時間
第２次のゲスト及び使用した教材	・親子ゲスト	・親子ゲスト	・視聴覚教材④

表７　第１次における発問内容

	I校	T校	K校
発問１	夫婦の会話を想像する	視聴覚教材①②③を見て，気づいたこと	誕生を迎える家族（夫婦，祖父母，曽祖父母）はどのような会話をするか想像する
発問２	視聴覚教材①をみて，曽祖母の発言について考える	男女に関することで気づいたこと	視聴覚教材①を見て気づいたこと
発問３	わかったこと （班で話し合い，発表）	班で話し合って気づいたこと	もし，あなたが，あっくんのお母さん，お父さんだったら，どんなメッセージを伝えたいか
発問４	思ったこと （個人記述）	授業感想	授業感想

４．分析方法

授業におけるワークシートの授業感想の記述内容の分析を行った。検討１として，ジェンダー平等（男女）に関する気づきが出現したかどうか，道徳的価値６項目（１．生命尊重２．家族愛３．思いやり４．感謝５．男女の理解６．ジェンダー平等）とその他を合わせた７項目で分類し，分析した。

また，検討２として，DVD教材の有効性を検証するため，実感をもった学びがあったかどうか，自分のことを記述した人数を調査した。

いずれも，男女別に集計し，授業展開との関係を分析した。集計にあたっては，メンバーで協議をし，一致を確認した。

５．結果

５．１．検討１「ジェンダー平等（男女）に関する気づきの出現」

図１～３には，発問４のコメント総数における７項目の割合，それぞれの項目の男女別の割合を示した。

男女の理解についての記述は，K校では男子6.5%，女子が12.2%，全体では9.3%見られた。T校で男子10.9%，女子は7.0%，全体では9.9%見られた。I校では男子が，18.0%，女子が13.6%，全体では15.0%見られた。ジェンダー平等に関する内容については，K校において男子5.6%，女子が8.4%，全体では7.0%見られた。T校において，男子10.9%，女子が2.8%，全体では6.9%見られた。I校においては，男子が18.0%，女子が26.4%，全体では23.8%見られた。各校に差がでているが，これは，前後の発問内容の影響

を受けたと考えられる。

具体的にどのような発問の違いがあったのかを検証した。ジェンダー平等に関する記述が最も少なかったのはT校であったため，T校と他の２校における相違を授業内容から考察した。すると，T校では，発問２で男女に関する記述をさせていた。そのために，その後に書かせた授業感想にジェンダー平等に関する記述はあまり出てこなかったと考えられる。

一方，ジェンダー平等に関しての記述が最も多かったI校における授業内容を，他の２校と比較した。するとI校では，発問２で，曽祖母の発言，男児を妊娠したことに対して「よくやった」というものを教師が取り上げ，これに対して考察させていた。教師がジェンダーに関する祖父母の発言を取り上げたことにより，より生徒がジェンダーについて考え，その後の授業感想にもジェンダーに関する表現が増えたと考えられる。

開発した視聴覚教材は，命の誕生から赤ちゃんのくらしを扱っていたため，生徒は生命尊重や家族愛について考え，学習感想への記述が多くなることは，予測ができた。しかし，教材の開発で意図的に入れてはいるものの，ジェンダー平等を前面に出していない映像教材にもかかわらず，全体で6.9％から23.8％でジェンダー平等に関する記述があった。このことから，開発した教材を用いることで，生徒に「ジェンダー平等」への気づきが現れることが明らかになった。

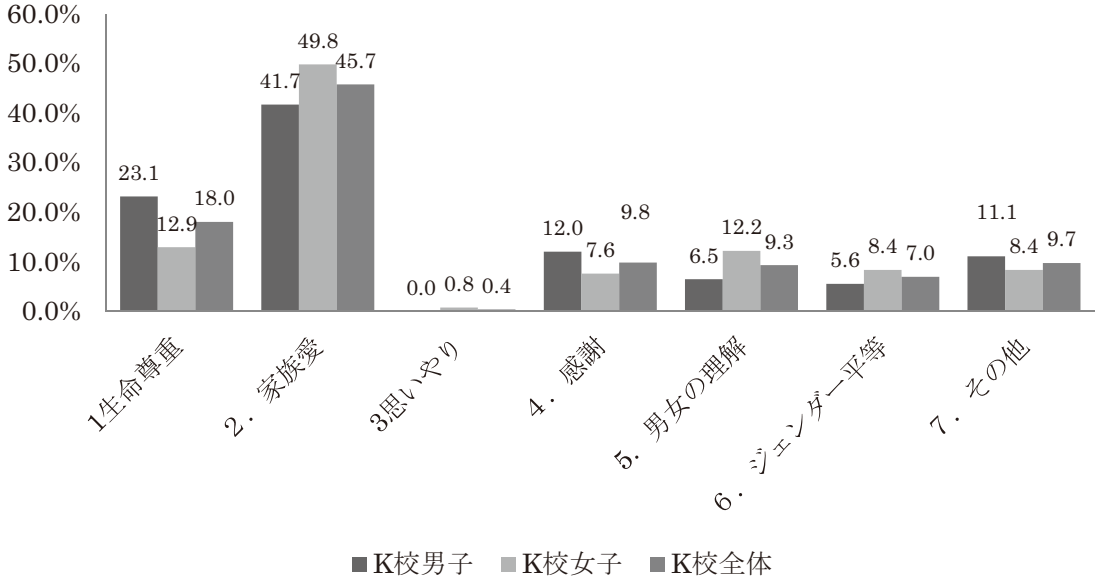

図１　Ｋ校におけるコメントと男女の割合

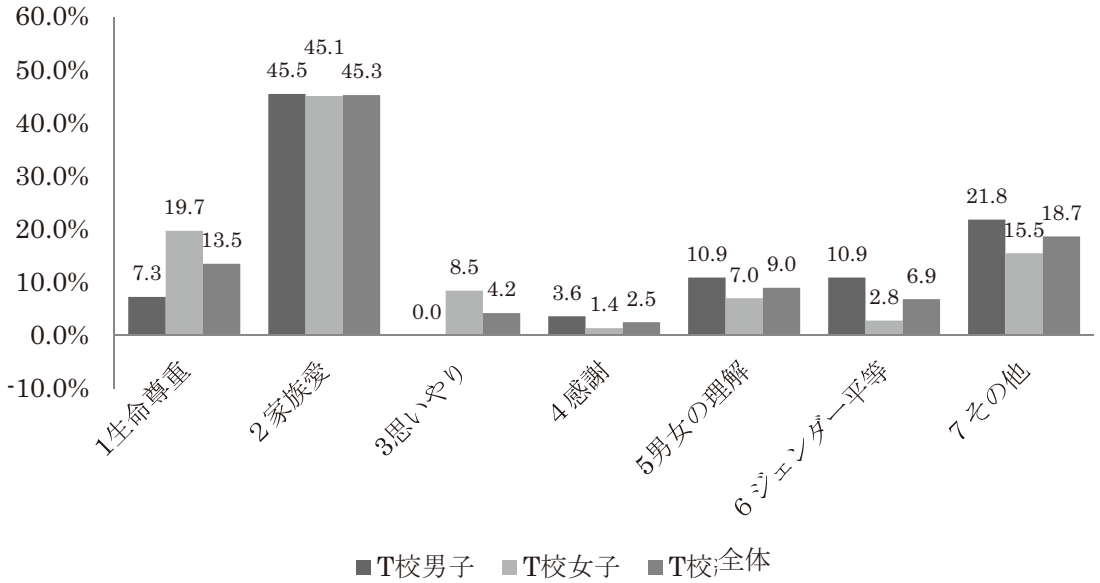

図２　Ｔ校におけるコメントと男女の割合

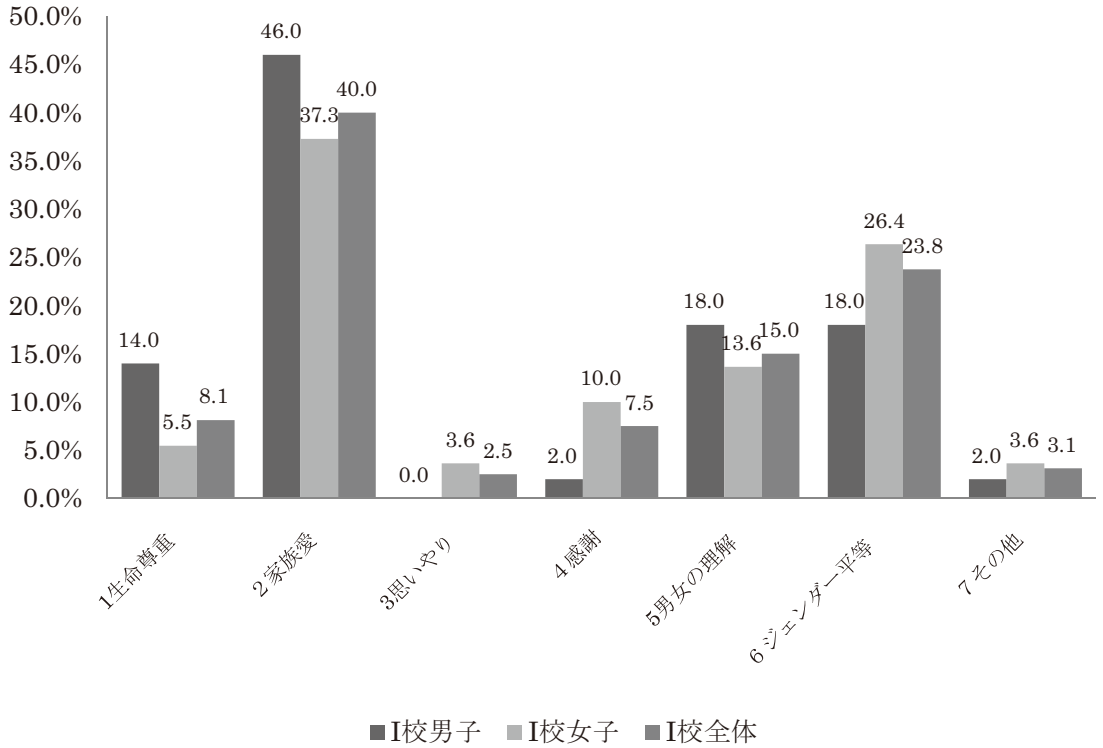

図３　I校におけるコメントと男女の割合

各校のワークシートにあげられたジェンダー平等に関する生徒の記述例を以下に示す。

- 性別の考え方の違いに気がついた。昔は男が望まれたが，今は平等になった。【女子】
- やはり，最近は性別は関係ないようである。私は女なので昔であれば弱い立場，こんな時代になって良かった。（中略）戦争をやっていた時期とは違って，今は男の子だけでなく女の子でも働けるので，男の子が生まれても女の子が生まれても喜ばれる世の中になっていると思いました。【女子】

この記述からわかるように，昔は性別による区別があったということ，現代は変わってきているということに気づいている生徒や，昔の家長制度に対する課題や現代でも性差についての課題があることを言及している生徒がいた。さらには，「日本は，男女の区別をされないので良いと思った。」という記述もあり，他の国との比較を行っている生徒もいた。

これらのことから，ジェンダー平等について，生徒は様々な感想を持っており，自分の生活と比較しジェンダー平等について考えていたり，これまでジェンダー平等について意識していなかったりすることが，この教材を用いることによって意識されていることが分かった。

- 昔は家を継ぐのは男で，男がいないと嫁さんが責められるということがあったらしいけれど，今の時代はそういうこともなく「どっちでもいい」という考え方が一般的なので平和だなと感じました。【女子】
- 日本は，男女の区別をされない（このDVDでは）ので良いと思った。【男子】
- 男と女では偏見がある。昔の見方をする人は今でもいる。【男子】

５．２．検討２「DVD教材の有効性」

開発したDVD教材の有効性を検証するため，親子ゲストを迎えた授業とDVDのみで学習した授業における生徒の授業感想から実感を持った学びがあったかどうか比較検討した。

ジェンダーに関する記述の多かったI校について焦点を当てる。親子ゲストを迎えた授業パターンAを行ったI校における授業感想の記述に，自分の現在，過去，未来のことを考えた記述があった生徒の人数の割合を調査した。

第１次のDVD教材視聴後では，10％程度だったが，第２次の父，母，赤ちゃんの親子ゲストの授業後では，図４のように変化があった。このことから授業の中で，夫婦と赤ちゃんの親子ゲストと出会うことによって，生徒は実感を持って考えることができたと言える。

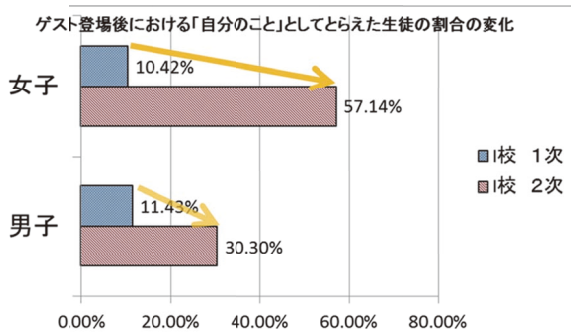

図４　I校におけるゲスト登場前後における「自分のこと」としてとらえた生徒の割合の変化

また，図５に示すが，第２次の親子ゲストを迎えた授業後の感想での，T校の数値も同様の傾向がみられた。男女で比較すると，女子のほうが男子より数値が大きいことから，実際に赤ちゃんに出会い，父母の話を聞くことによって出産，育児について現実的にとらえることができたのではないかと考えられる。学習前よりも，学習後のほうが「自分のこと」としてとらえた記述が増えたことから，親子ゲストを迎えた授業は，有効であったといえる。

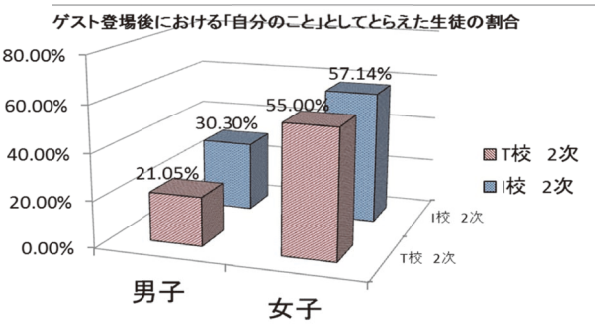

図５　I校とT校におけるゲスト登場後における「自分のこと」としてとらえた生徒の割合

次に，開発したDVD教材のみで授業展開を行った場合に生徒に「自分のこと」として実感を持てているかどうか，K校の結果を他校と比較した。結果は，図６に示す。

K校では，親子ゲストを迎えず，映像教材のみを使用していたにもかかわらず，「自分のこと」としてとらえている生徒が男子76％，女子71.79％と，I校・T校より男女ともに高くなっていた。このことにより，親子ゲストを授業に迎えない授業パターンBにおいても，開発したDVD教材で効果があったことが検証できた。

さらに，K校の割合が一番高くなった理由として，３校の教師の発問を比較すると，K校のみに，教師から「もし，自分があっくんの母親，父親だとしたらどういうメッセージをつたえたいか？」という発問があった。そのため，個の教師の発問により生徒は人ごとではなく「自分のこと」としてより答えられたと考えられる。

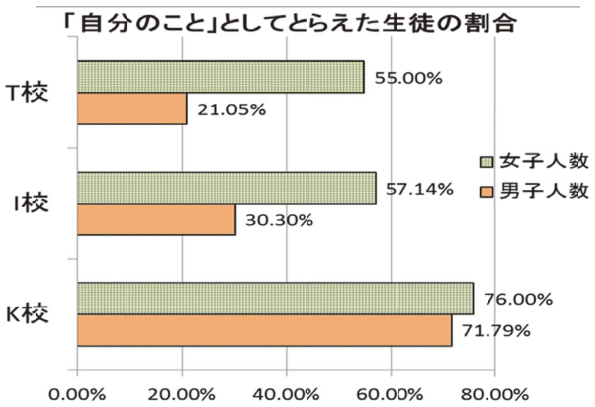

図６　各校における「自分のこと」としてとらえた生徒の割合

「自分のこと」として捉えている生徒の記述内容を以下に示す。反抗期の自分自身と親との関係を見つめ直した生徒，子どもを持ちたいと思った生徒，反対に，持ちたくないと感じた生徒，男性の育児参加の重要性を感じた生徒がいた。よって，「自分のこと」として考えた生徒でも，様々な観点から自分を捉えなおしていることが分かった。

- 「親」って何だ？って思っていたのをあっくん親子の話を聞いて少し分かった気がした。【男子】
- 親は自分のことをどう思っているのか気になった。自分から生まれてきた子供が自分に意見したり，反抗したりするのは，やはりむなしいとか悲しい気持ちになるのだろうなと思う。【女子】
- 赤ちゃんはかわいい。自分が子どもを産むって実感わかなかった。でも，ビデオを見てリアルさが伝わってきた。私も子どもがほしいなと思いました。【女子】
- 睡眠時間を削ってまで子供を育てたいとは思わない，お金もかかるし将来が見えず，子供を持つリスクが高すぎる。【男子】
- 子供が欲しいって思うのもわかる気がする。お父さんも子育てに重要なんだな。【女子】

６．考察

本研究では，授業パターンAゲスト親子を迎えた授

業，授業パターンB視聴覚教材のみでの授業，と異なる授業展開を行った。しかし，授業パターンが異なったにも関わらず，どの学校でもジェンダー平等に関する記述があった。これは，開発した教材に，夫婦の生まれてくる子どもの性別に関する会話や，父親の育児参加場面を取り入れたからであると考えられる。さらに，生徒が自分のこととして捉えた記述を多くしていたことは，作成した教材が，作られた映像でなく，リアルな夫婦・家族の姿を示したからであると考える。特に，父親の反応を生徒がよく観察しており，父親の存在を見たり，その意見を聞いたりしたことが「ジェンダー平等」につながっていたのではないかと考える。教材の中で，父親・母親の気持ちについて誕生前から誕生，成長していく場面と追っていった。これは，生徒にとって自分たちが知らなかった両親の気持ちについて知るきっかけになっている。さらに，父親・母親双方の正直な気持ちと，家族の誕生による変化に触れることにより，これまで自分たちの知らなかったジェンダーバイアスについて考えたり，感じていたジェンダーバイアス的行動について振り返ったりしていた。このことからも，生徒にとって「ジェンダー平等」を前面に出さない教材であっても，教材の中から「ジェンダー平等」について考えるきっかけを見つけることができることが分かった。さらには，映像教材で，異世代の話を聞くことは，日本における古い考え方に触れることができ，時代の変化とともに「ジェンダー平等」についての考え方が変化していることを感じ，生徒自身がどのような社会を作っていきたいのかまで考えるきっかけが作れることが分かった。

家族を含め，人との関わりが希薄になっていることが現代の課題であり，家族領域を扱う家庭科の授業の中でも向き合っていかねばならない点である。そこで道徳的内容「ジェンダー視点」を持った新たな教材を開発したことには大きな意義があったと言える。

親子ゲストの有効性も検証できたが，親子ゲストとの出会いにより，赤ちゃんの成長に対する疑問など生徒の視点が広がった様子がうかがえた。K校の実践結果より，DVD教材のみの学習であっても，8割近くの生徒が自分の具体的な生活をむすびつけて考えることができた。さらに実践を重ね，開発したDVD教材の有効性について検討できたらよいと考える。そして，この実践は，附属中学校の生徒に対して行ったものであるので，今後は，教材を発信し，広く活用できるようにしたい。他の学校での実践をふまえ，さらなる改良ができるとよいと考える。

7．参考文献等

1）堀内かおる（1999）〈家庭科における総合的学習〉をつくる視点としてのジェンダー：家庭科の教科アイデンティティに関連して．横浜国立大学教育人間科学部紀要．2．31-47

2）吉岡良江・吉村敏子・林未和子（2010）幼児理解をめざした授業実践研究．三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要．30．69-75

3）河村美穂・吉川はる奈・長島クミ子・鈴木美幸・井上弘江（2005）発達を中心とした保育学習に関する実践研究―中学生の振り返りから―．埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要．4．107-117

4）青山裕美・浅井美智子・瀬口こずえ・西垣亜紀・村井陽一・山田三栄子・今村光章（2008）家庭科における保育教育の充実を目指して―教師たちの振り返りを通じて―．岐阜大学教育学部教師教育研究．4．271-282

5）立松麻衣子・原口あかね・湯川聰子（2007）中学校技術・家庭科における保育の学習内容の検討．日本家政学会誌．38（5）．271-281

6）文部科学省　中学校学習指導要領解説　道徳編　平成20年（2008）

7）文部科学省　中学校学習指導要領解説　技術・家庭編　平成20年（2008）

8）NHKビデオ教材「赤ちゃんと　共に育ち育てる」

本研究は，東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」による助成を受けて，筆者らが阿部睦子（附属高等学校），桑原智美（附属世田谷中学校），酒井やよい（附属竹早中学校），藤田和美（附属小金井小学校）とともに共同で研究を行った成果を，筆者らがまとめたものである。

中学校家庭科で道徳的価値「ジェンダー平等」をはぐくむ視聴覚教材の開発

Development of Audiovisual Educational Materials to Cultivate the Ethical Value of Gender Equality in the Junior High School Home Economics Curriculum

大竹　美登利*・池尻　加奈子**・小野　恭子***
佐藤　麻子****・石津　みどり*****

Midori OTAKE, Kanako IKEJIRI, Kyoko ONO, Asako SATO and Midori ISHIDU

家庭科教育学分野

Abstract

The new governmental education guidelines require that ethics be taught not only in special ethics classes but also as part of the curriculum for each subject. Accordingly, we have endeavored to develop home economics lessons dealing with the ethical value of gender equality. We believed that it would be relatively easy to incorporate the issue of gender equality into home economics curricula, given the fact that our discipline has historically concerned itself with the management of daily life based on a traditional gender-based division of labor.

We developed audiovisual educational materials related to the formation of family perceptions vis-à-vis childbirth and the participation of both parents in child rearing, intended for use in family/child care lessons of home economics curricula at the junior high level. The objective of this research, then, was to evaluate the extent to which the developed material helped increase students' awareness of gender and encouraged students to think about problems related to gender.

The lesson involved a viewing of the DVD that was developed. This was followed by a visit to the classroom by the family and infant(s) appearing in the video, which included a question and answer session with the students. Analysis of student responses to a worksheet that was filled out as part of the lesson revealed the following:

1. In three trials of the lesson with three different groups of students, between 5 and 40% of students made comments related to their awareness of gender, while more than half wrote about the birth of life. While these results indicate that the DVD did not strongly emphasize gender as a theme, the fact that some students commented on gender regardless suggests that the material is, to a certain extent, effective in increasing students' awareness of gender.
2. Many of the students' comments on gender equality were made in relation to the students' own personal lives. It is believed that the visit to the classroom by the actual family and couple appearing in the DVD helped students to relate to the lesson and resulted in greater numbers of comments tied to the students' personal experiences.

* Division of home economics in Tokyo Gakugei University
** Tokyo Gakugei University Special Needs Education School
*** Hokkaido University of Education Kushiro School
**** Tokyo Gakugei University Koganei Junior High School
***** Tokyo Gakugei University International Secondary School

Key words: Home Economics Education, Gender, Child care, Moral education

Department of Home Economics, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 新しい学習指導要領では，「道徳」の授業だけでなく各教科の中でも道徳的学習に取り組むことを要請している。そこで，男女平等の道徳的価値を取り入れた家庭科の授業を開発することとした。男女平等・ジェンダーという価値意識は，伝統的な性別役割分業に基づいた生活の営みを扱う家庭科の中で，扱いやすい題材と考えた。

そこで，本研究では，中学校における家族・保育領域の中で，子どもの誕生への家族の意識形成，子育てへの夫妻の関わりについての視聴覚教材を開発し，生徒がジェンダー意識に気づき，男女を取り巻く問題について考える事ができたかどうか，その学びの検証を行うことを，研究の目的とした。

授業は，まず開発したDVDを視聴し，次にDVDに登場した家族と赤ちゃんに教室に来てもらって生徒との質疑応答を行った。これらの授業での生徒のワークシートへの記述や発言を分析した結果，次のようなことが明らかとなった。

1．３つの授業実践では「ジェンダーの気づき」を記述した生徒は５％から40％で，それよりも「命の誕生」を記述した生徒が半数を超えて多かった。ジェンダーを強く前面に出すDVDでは無かったことがこの結果に反映しているが，にもかかわらずジェンダーに関する記述があったことから，ジェンダーに気づくために一定の効果がある教材といえる。

2．自分の生活にむすびつけた「ジェンダー平等」意見が多くあった。授業に，DVDに登場した親子に参加してもらい，リアルな夫婦や親子関係をみたことが，自分の現実の生活と結びつけた意見が多くなることにつながったと考える。

キーワード: 家庭科，ジェンダー，保育，道徳